

序

副腎皮質ステロイド、コルチコステロイド、グルココルチコイドなどと呼ばれているステロイドは、主として抗炎症作用と免疫抑制作用を期待され、多くの疾患、病態に使われている。しかし、実際にはステロイドの生理作用、薬理作用は多くの代謝系や臓器に及び、きわめて幅広い、そして副作用で大きな問題となる電解質コルチコイド作用を軽減させるためや、血中半減期の延長や受容体との結合を強化する目的で、種々の薬剤が開発され、投与形態もさまざまなものができている。

それでは、多様な疾患・病態に対して、このように多くの種類の薬剤をどのように用いたらよいかという点に関して、最近重要視されている臨床エビデンスは、実はきわめて限られていると言ってよい。合成コルチゾンがはじめて臨床に使われて60年以上経ち、薬価も高くない薬剤を用いた臨床試験が、今後も多く行われることは期待できないであろう。そこで、使用のノウハウは経験に頼る部分も多くなる。この点では、ステロイドは今まで多くの領域で多くの経験が蓄積されている薬剤と言ってよいであろう。

しかし、一人の医師として、実際に種々の病態にどのようにステロイドを用いたらよいか、ということに関しての情報は簡単には集めようとしても集まらないことが多い。たとえ周りに多くの医師がいる場合でも、よくわからないという答えの方が返ってくることが多い。

本書はこのようなステロイドに関する臨床の状況をふまえ、実際の実践的な経験も含めた情報を少しでも多く収載することを目的として、医師と薬剤師の多くのエキスパートの方々に執筆いただいた、少しでも読者の皆様の臨床のお役に立てば幸いです。

2010年1月

編者を代表して
山本一彦